

ぎょけいもんこくせき

魚形文刻石・資料

令和6年12月 作成

矢島郷土資料館
矢島教育学習課

魚形文刻石（ぎょけいもんこくせき）について

1、説明板（資料館入口）

2、秋田県・文化財（考古資料）

3、「矢島町の文化財」より説明文

4、龍源寺の鮭石
「境内の説明板」

5、吹切の鮭石
発見場所 発見の経緯 調査結果
文化課・富樫先生所見

6、資料
つり関係の雑誌に掲載された記事

7、矢島町の鮭石遺跡発掘報告書 ——武藤鐵城——

魚形文刻石（鮭石）一覧

No	発見場所	発見日	文化財指定	備考
1	城内字杉沢	昭和6年 発見 昭和28年 発掘	県・昭和28年10月5日	長径 150cm 短径 90cm 厚さ 45cm
2	荒沢字上針ヶ岡	昭和28年	県・昭和28年10月5日	長径 80cm 短径 68cm 厚さ 60cm
3	荒沢字大谷地	昭和27年	県・昭和28年10月5日	長径 65cm 短径 40cm 厚さ 35cm
4	荒沢字根城		県・昭和31年5月21日	
5	城内字吹切30番地先	昭和63年10月		長径 90cm 短径 60cm 厚さ 40cm
6	城内字田屋の下26番地	平成元年4月	町・平成2年5月7日	長径 140cm 短径 80cm 厚さ 70cm

1、[説明板] (資料館入口)

秋田県指定文化財 考古資料

魚形文刻石

指定 昭和28年10月5日

位置 矢島町城内字前杉

『この刻石は、前杉の岡の中腹から発見されたもので、地元では俗に鮭石（さけいし）の愛称で呼び、早くから学者の注目するところとなっていた。

エラはわずかにカーブを見せ、口は直線状、目は丸点、尾はバチ形で12尾ほどが判然し一見雄渾なタッチである。

昭和28年に付近を発掘の結果、組石2基、石器と中期土器などの遺物が掘り出され石器時代中期の刻石文と判定された。魚形を表した目的はいろいろ考えられるが、豊漁を祈ったものと想像され、また刻文に使用した利器は石小刀であったと見られる。

この位置に立って、北前方（矢印）に見える杉林が出土地の前杉山である。昔の矢島湖盆や子吉川に臨む東南向き斜面で、岡の上は大館と称する館主未知の古城跡で台地をなす。また背後は鳥海山麓の広漠たる林野へと続き、日照良く湧水に富み、その上漁撈と狩猟に事欠かない先住民居住の適地であったろう。』

*縄文時代中期

2、秋田県・文化財（考古資料）

矢島町城内字前杉	昭和28年10月	5日	指定
荒沢字上針ヶ岡	昭和28年10月	5日	指定
〃 大谷地	昭和28年10月	5日	指定
〃 根城	昭和31年	5月21日	指定

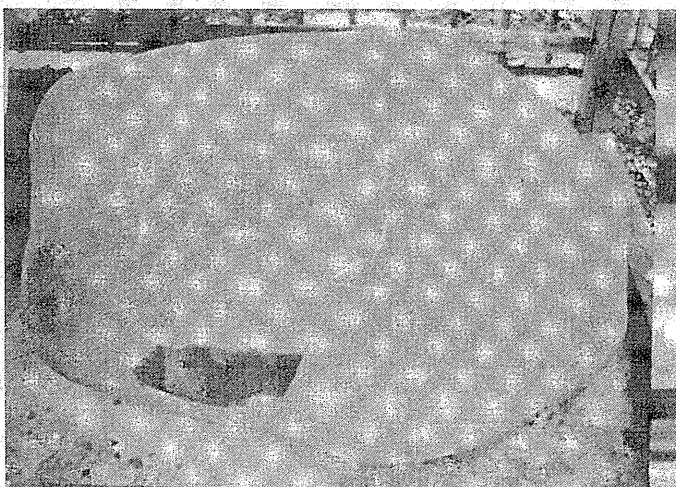
3、[矢島町の文化財] より説明文

魚形文刻石

指定 県重要文化財 昭和28年10月5日
所在 ⑦ 矢島町資料館
所有者 矢島町

魚形文刻石は、通称鮭石とも呼ばれ、30cm～1m前後の自然石に魚形を刻んだ石の総称である。

前杉の魚形文刻石は、直径1.5m、短径90cm、厚さ45cmの安山岩の自然石で、昭和6年（1931）前杉の丘陵の中腹から発見

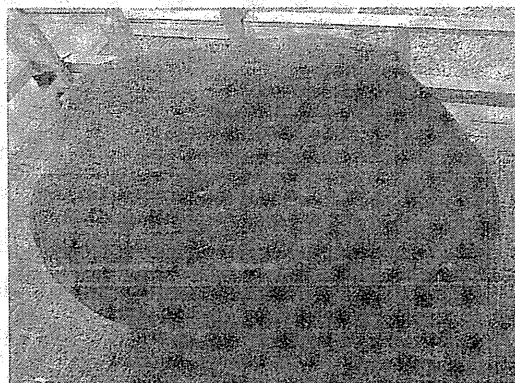
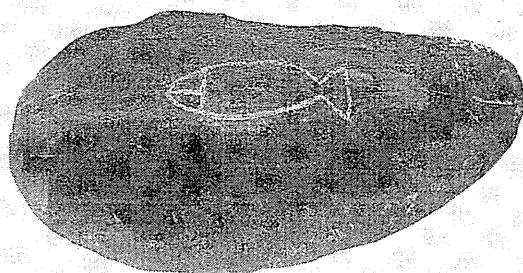


された。この石には多くの魚形が線刻されて、このうち12匹が判然としている。大きさは最大52cm、最小10cmである。鰓はわずかにカーブし、口はそれまで直線、目は丸点、尾は撥形と、一見象徴的であるが、すこぶる雄渾なタッチである。昭和28年（1953）、付近を発掘調査した結果、組石2基、石器、縄文中期の土器などが発見され、縄文時代中期のものと考えられる。現在、町資料館に移されている。

魚形を表わした目的については、いろいろ考えられるが、豊漁を祈るためであったのかもしれない。また、線刻に使用した利器は、石小刀であったと見られている。このほかにも県指定が3個ある。

魚形文刻石

指 定 県有形文化財(考古資料)(史跡) 昭和28年10月5日
所 在 矢島町七日町字羽坂64-1矢島町資料館
所有者 矢島町



魚形文刻石は、通称鮭石とも呼ばれ、30cm～1m前後の自然石に魚形を刻んだ石の総称である。

前杉の魚形文刻石は、直径1.5m、短径90cm、厚さ45cmの安山岩の自然石で、昭和6年（1931）前杉の丘陵の中腹から発見された。この石には多くの魚形が線刻されて、このうち12匹が判然としている。大きさは最大52cm、最小10cmである。鰓はわずかにカーブし、口はそれまで直線、目は丸点、尾は撥形と、一見象徴的であるが、すこぶる雄渾なタッチである。昭和28年（1953）、付近を発掘調査した結果、組石2基、石器、縄文中期の土器などが発見され、縄文時代中期のものと考えられる。現在、町資料館に移されている。

魚形を表わした目的については、いろいろ考えられるが、豊漁を祈るためであったのかもしれない。線刻に使用した利器は、石小刀であったと見られている。このほかにも県指定が3個ある。

4、龍虎寺の蛙石 「境内の説明板」 発見経路

龍源寺 矢島町城内宇田屋の下26

[説明板]

平成2年5月7日 町文化財指定

長径80cm 短径70cm 厚さ70cm 安山岩

この魚形文刻石は当寺境内から平成元年4月、工事中に発見されたものである。魚形は大きく線刻され、2尾は並んだ状態で描かれ、1尾は「さけ（サケ）」の特徴をよく表している。魚形文刻石は別名「さけ石」と呼ばれ、縄文時代中期（約4千年前）のもので、縄文時代の人々の経済生活、呪術的な生活を物語る遺物と考えられている。先に矢島町前杉、針ヶ岡など3ヶ所から発見されており、これらは秋田県の有形文化財（考古資料）指定されている。

[魚形文刻石（鮭石）発見経路]

発見場所 矢島町城内宇田屋の下27 龍源寺墓地内

経緯 墓地造成のため大きな石数個を移動中、石に何か模様があり住職に知らせる。

(山科建設社員)

線刻があり鮭石に間違いないようなので平成元年4月10日公民館に知らせる。先住の話し：この石は昭和48年に墓地を造成するため杉林の中にあつたものを現在地に移動したもの。（約5メートル位）当時は何も確認されていない。

公民館長 〃が現場に行き鮭石と確認。写真撮影をする。貴重なものであるので慎重な取扱いをお願いする。

4月11日文化財保護審議会が開催され報告。今まで発見された鮭石と比べ大きさ形が異なる。

石の大きさ約70cm、横約120cm。線刻の大きさ65cm、48cmの2尾。1尾に背びれあり)

文化財保護審議委員が現地に行く。専門家に調査依頼することにする。

同12日、埋蔵文化財センター副所長・富樫先生に連絡。

同13日、県立博物館・庄内先生に連絡。

同14日、午後4時頃、龍源寺よりまた鮭石らしいものがあるとの連絡があり、館長、〃が現場に行く。先に発見された石の付近を掘ったところ土中（堰の中）から数個の石が出る。その中に線刻らしいものがみられたが泥で汚れてはつきり確認できなかった。

同18日、教育委員会に報告。

5月4日、午前8時40分頃、富樫先生来町。館長、〃と現場に行く。住職立ち会いの上、調査。（龍源寺の役員会に報告し貴重な石であるので鞘堂を建てて保存することに決定済みとのこと。）

富樫先生所見：間違いなく魚形文刻石である。他の1個は不鮮明でさらに調査を要する。（後日、線刻ではなくキズであることが判明）写真、拓本をとる。

5、吹切の鮭石

発見場所 矢島町城内字吹切30番地先。

役場の西方約500メートルの通称樋上と呼ばれる沢づたいにひらけた階段状の水田地帯がある。発見場所は、その北側の傾斜地の上、標高約160メートルの場所で道路（旧道）と水路の境である。この東側に約60メートル行くと階段状の田になり眺望がひらけ市街地一円が見わたすことができる。西側は小高い台地の山林が続き、約100メートルで急激な傾斜地になる。

経緯 昭和32年頃、大日向昭一氏が稲を背負い、発見場所の道路を通っていた。稲を背負いこの石で度々休んだ。その時、何か魚の形を刻んだ変な石だなと思っていた。

昭和45年頃、役場の前にある魚形文刻石（県指定文化財）を見て以前のことを思い出し、菊地隆太郎先生に話をし現場で調査してもらった。拓本や写真をとって帰ったがその後何も連絡がないまま忘れていた。

調査経過 昭和63年10月。佐々木正隆氏が町の文化財保護審議委員になったことを知り、魚形文刻石のことを思い出し話をした。佐々木氏と現場へ行ってみると、道路を広くするため石が動かされ昔の状態ではなかった。

同10月11日、佐々木氏より資料館・今野銀一郎氏に連絡があり教育委員会と4名で現地に行き、魚形文刻石らしいことを確認。県文化課・富樫先生に連絡。すぐ現場から運ぶようにという指示で12日、資料館に運ぶ。

15日、富樫先生が調査。魚形文刻石と確認。11月6日、富樫先生の指導で発見現場の北側台地4ヶ所の発掘をしたが、石器などの遺跡は発見されなかった。（時代の特定は今後の調査による。）

過去に矢島町で発見された4個の魚形文刻石と刻んだ形が異なり背びれがある。尾は撥形ではなく跳ね上がっている。

石の大きさ、長径約90cm、短径約60cm、厚さ約40cmで一部が欠けている。

発掘方法 人力により、石の周り1メートル四方を約1メートルの深さまで掘った。

文化課・富樫先生所見

この魚形文刻石は、石の上面に1尾だけ線刻されたものである。

大きさは、長さ21cm、幅6.7cmほどである。魚形は幅3mm前後の線で描かれ、口は鋭角にとがったところから、少し上に直線で引かれ目ははっきりしていない。頭部との区画は背ビレと同じ場所から直線で下に、背ビレは長さ7.5cm、幅1.5cmとしっかり表現されている。尾ビレははっきりしないが5条の線で表現され、少し上向きになっている。

魚形文の刻線は幅5mmほどで浅い。これは他で発見されているものより骨太に描かれている。

以上がこの魚形文刻石の状態である。これを現在、県内から発見されている魚形文刻石と比較してみると、ほとんどの魚形文刻石は背ビレが描かれていない。また尾ビレに数条の刻線を施した例も少ない。その中で、もっとも近いものは矢島町根城発見の魚形文刻石である。これは、2尾の魚が交叉した状態で描かれており、2尾とも背ビレが描かれている。中の1尾には腹ビレもあり尾ビレには「放射線」が引かれている。このものに最も近いものである。尾ビレが上向きに表現されたものには阿仁町根子のものである。

このように、現在まで県内で発見されている魚形文刻石と類似しているものがあり、それらと一連のものと考えてよいと思われる。

魚形文刻石の発見現場付近を一部試掘調査を実施したが、遺物、遺構など発見されず、この魚形文刻石に時代、時期については不明である。

6、資料 つり関係の月刊誌から

縄文人が語る“サケ石”の秘密

“サケ石”と呼ばれる不思議な石が秋田県で見つかっている。1 m前後の固い安山岩に魚の形が線で刻まれているもので、石器時代の遺物が並出するところから、一般には縄文人がサケの豊漁を祈って石に彫りつけたものだとされている。

自然石に絵が彫刻されていること自体が珍しく、発掘例の数の少なさからみても特殊な遺物として考古学の間には知られている。

今のところ、明らかに魚を表現したものだと識別できるものは、日本で6個発見されており、そのうちの5個まで秋田県に集中していることは特筆すべきである。

発見された場所を列記すると次のようになる。

①秋田県雄勝町稲住温泉敷地内

(これは江戸時代から知られており、菅江真澄が“魚形石”という名前で著書「雪の出羽路」に記している。) 大正時代に敷地を地ならしした時に再発見された。今はそこがプールになっている。最大魚が45 cm、最小魚が10 cmで、6匹ほど線刻されている。

②秋田県矢島町前杉

通称エビス森。昭和6年発見。その年の晩秋、喜田亨吉博士が調査。昭和28年、秋田市豊岩生まれの民俗学者・武藤鉄城を中心に矢島町教育委員会が“サケ石”の周囲を発掘。縄文時代中期の土器片、石斧などの石器が併出。最大魚52 cm、最小魚はやはり10 cm。大小11、2匹見られる。

③秋田県矢島町大谷地

標高400メートルの鳥海山麓の高地で、昭和27年発見。磨製石器1個併出。魚は1匹だけで、体長は25 cm。魚の描写は前杉のものや後述する針ヶ岡のものと酷似している。

④秋田県矢島町針ヶ岡

昭和28年の春、鳥海山登山新道の工事の際、転げ落ちてきたもので、大小7、8匹描かれている。最大が32 cm。

⑤秋田県阿仁町根子

昭和29年、根子小学校へ通じる小道の脇にある個人の敷地内で発見。大小6匹線刻されている。やはり、10cm程の小魚が同時に描かれている。

⑥岐阜県清見村

門端遺跡（縄文中期末）の発掘が昭和44年に行われた際に出土。長径16cmの小さな石に魚が4、5匹線刻されていた。魚の大きさは4～5cm。今までの中で一番小さな石であるが、発掘担当者の山本喜男さん（77才）によると、もう少し大きな石から削げたものと思われるという。

“サケ石”というのは実は俗称で、考古学上の正式な呼び名は「魚形文刻石」となっている。地元の人々が魚の形を見て“サケ供養碑”と考えて板野で、それがそのまま呼び名になってしまったいきさつがある。“サケ石”の発掘に情熱を燃やした武藤鉄城も、この石を何と呼称すべきか大いに迷った、と記している。（『鮭石遺跡発掘報告』全文16ページ、矢島町教育委員会、昭和29年刊）

彼自身“サケ石”という呼称を使用しているが、魚種の選定には断言を避けている節があり、サケなのかマスなのか、または他の魚を描いたものなのか、釈然としないものがあったようだ。事実、報告書以前に記された彼の著書「秋田郡邑魚譚（あきたぐんゆうぎょたん）」の中で雄勝町稲住温泉の“サケ石”に触れ、次のように書いている。

「鮭と見れば鮭である。然しもし付近の川（役内川および支流の赤石沢のことらしい）へ遡って行く鱒のことも考慮に入れる必要がある」 文中（ ）は筆者

縄文人が石にわざわざ刻みつけたこの魚は、いったい何なのであろうか。。。考古学者ならずとも、私達釣り人にも強い興味が持たれる。というのは、6個とも海岸の貝塚やそれに近い付近からは発見されておらず、海からはるか上流の、いわば溪流のほとりで見つかっているからだ。

それらの場所は岐阜県のものも含め、現在でもヤマメやイワナの好釣り場として釣り人には馴染みの深い所ばかりなのである。稲住の“サケ石”の近くには役内川が流れている。矢島町のものは子吉とその支流である。

阿仁町の根子の“サケ石”は溪流の本場、阿仁川が流れ、発見された場所は根子川の河岸段丘。しかも阿仁マタギの集落でもあるのだ。岐阜県のは神通川の最上流。分水嶺に近い場所である。

さらに不思議なことは、6個ともすべてが日本海に注ぐ川の上流である点だ。これは何を意味しているのだろうか。

“サケ石”にまつわる謎を追っていくと、東北の川と共に生きた縄文人からの熱い思いが、今私たちに届くのである。

7、矢島町の鮭石遺跡発掘報告書 ————武藤鐵城———

矢島町の鮭石遺跡発掘報告書
—前杉・針ヶ岡・大谷地—

武 藤 鐵 城

発掘まで

発掘は昭和28年6月行われたのであるが、その動機を述べる前に、先ず鮭石そのものについて述べなければならない。

昭和6年、秋田県由利郡矢島町の植田末次氏は、同町前杉に魚形を数多線刻してある大石を発見した。それを矢島史談会の佐藤直太郎、佐藤勇三、佐々木熊造の諸氏が踏査、はじめて世に紹介し、県内考古研究家の注意をうながすところあった。それによって、同年6月11日に秋田考古会から深澤多市氏の調査があり、さらに同年11月10日には喜田貞吉博士が調査、「秋田考古会々誌」第2巻第5号に、雄勝郡秋ノ宮村稲住温泉の魚形石とあわせて、見界を発表された。その結論には、「矢島や秋ノ宮の魚の石面刻文が、果してどんな意味で彫られたかは勿論明かになし得ぬまでも、前記鹿供養や魚供養の傍例から類推して、やはり古代に於ける一種の魚供養の記念碑ではなかろうかと思われる」と、古代という文字を使用し、それが石器時代の遺産かどうかについては触れなかった。

武藤は、去る昭和14年5月16日に、同郡直根村字百宅部落のマタギ（獵人）事情調査の途次、佐々木熊造氏の案内でその石を調査、翌15年4月、アチツクミュージアム刊行の拙著、「秋田郡邑魚譚」に、その旅行の帰途、由利から雄勝に抜けて調査した秋ノ宮のものと同じ共に採録、詳述しおいたのであった。

以来、大戦のことなどもあり、その石の存在もあまり世間に注意されなかったところ、矢島町の教師であった齋藤武夫氏が、石の保護保存を熱心に提唱し、同氏主宰の矢島郷土史学会の事業として、鮭石周辺の発掘を計画するにいたった。

発掘は6月13日、14日の両日行われ、郷土史学会員はじめ、同町公民館、観光協会、中学並びに高校職員、生徒達などの協力、測囲は主として矢島営林署長大森治夫氏が当ってくれるなど、全町挙げての文化事業であった。

武藤自身は、昭和14年に始めて調査の際、その描線の彫り道具を石小刀と思考し、石器時代民の芸術と判断していたので、若し発掘により、そのあたりが石器時代遺跡と判明すれば、それが事実であること裏書きされるので、喜んで発掘担当の役を引き受けたのであった。

あまつさえ、その前年の昭和27年5月、齋藤氏が、鳥海山、約500メートル高地の大谷地で発見された石には、ただ1尾だけであるが、その表現が前杉のものと全く酷似した魚形の線刻があり、しかも磨製石斧を1箇伴出しているので、前杉も必ずや石器時代遺跡と確信し、出土の土器により、その鮭石の石器時代としての年代を知ることの出来る期待を懷いて、発掘に望んだのである。

なおまた武藤にはこの発掘を機会に、顕明し置きたいことが一つあった。それは由利郡と雄勝郡を境する八塩山に産する鉄石英が、石器原料石として、矢島町から深く入った川内村の数多い遺跡の石器の、約3分ノ2も占めているという、北海道の十勝石、すなわち

黒曜石にも比敵する使用率であること、同27年秋に、同村地帯を調査し居られた興野義一氏の蒐集品を見て知り驚いたので、その鉄石英を原料とする石器が北漸して、矢島町の鮭石遺跡まで及んでいるかの事実を知りたいことであった。

遺跡の位置、地形

海拔2,230メートル、出羽富士の称ある美しい山容を誇る鳥海山の銀冠が裾をひいて、出羽丘陵を形成する間もなくの東北面は、それと対峙して雄勝郡と境する八塩山（713メートル）から走る丘陵との間に、子吉川のスラロームが無でて平らにした最初のギャップに突き出て、そして尽きている。（第3図、下）

矢島町がその面に建設されており、町からの、いわゆる矢島街道を、その突起部のスロープに沿って北に辿ってゆくと、矢島線鉄道トンネルの上方、標高110メートルの景勝の地点に前杉の鮭石がある。（第3図、上、△）

その地点は一般に、前杉と呼ばれているが、恵比寿森と称する者もあり、鮭石との関係を想わしめ、上方の120メートル高地は台地となり、その面全体が大館とも称され、戦国時代の館跡であることも物語っている。

発掘

発掘はボーリングにより、鮭石の長軸に沿って東側2メートル下方と、西側1メートル上方の距離に、1メートル半幅のトレンチを通したら、意外にも両者の表土下、約20センチから積石塚が出現したので、そのため露天掘を行うことになった。

西上を第1号。（第4図、①。第5図）、真下を第2号。（第4図、③。④。第5図）と命名。

▼第1号積石

長軸南北に延び、約3メートル、短径1メートルほど。拳大からその2倍、3倍ほどの河原石の、丸石、平石などから構成されているが、約50センチほどの間隔を保って、主石と思われる大石が4箇所置かれてあった。

発掘途中、南部分から石小刀3管、（第6図②の5・7・9）と、中央から少量の木炭が出ただけで、遺物は少なかったが、解体してロームまで発掘するに及んで、その北部主石下に、次のスケールの穴が出現した。

径1メートルの大体円形、そして東部から20センチ、37センチ、39センチと、次第に西に深い穴。

しかし内部からは、何物も検出し得なかった。（第4図、②。第5図）

▼第2号積石

長軸2メートル50センチ、幅80センチ、主石2箇所。しかし構成の石は1号のものよりも大きく、組石の感じをうける。この積石の西縁からは、厚手土器小破片、（第6図①）が1箇所出た。また、北側から石小刀2箇所、（第6図②の4・6）出土した。この2号積石は、積石塚のモデルとして遺し置くため、解体しなかったので下方に穴の有無は検し得なかった。

▼鮭石の周辺

鮭石の直ぐ廻りも発掘したが、石の北西、僅か35センチの距離、しかも35センチの

深さから、厚手土器破片1箇（第6図①、1）が出土、続いて65センチの地点から磨製石斧と、半磨製石斧、（第6図②、1、3）が出た。また東部、ほとんど鮭石に沿うて、石小刀1箇、（第6図②、11）が発見された。

連跡の範囲

遺跡は鮭石を中心に、相当広汎であるらしい。石の東南下方約20メートル地点の畑地からは、凹石が二箇出ているし、東下方11メートル70センチ地点に立っている電柱の傍からは、有脚石皿破片、（第6図③）が出ている。

また東北方に約50メートルほど隔たる、一段低い地点から、同年春に植林の際、土石器が多量出たと語る土地の人もいた。さらに鮭石から約20メートル上方の、前述大館台地も、鮭石傍から出た土器と同じ中期厚手土器の豊富な散列地である。（第6図①の3、4、5。④）

遺物

▼鮭石

この石を何んと呼称すべきかについては、大いに迷ったことである。「魚形石」では、魚の体型の造型芸術のように誤解されるし、一時「魚形爬刻石」なる名称を使用したか、新聞や雑誌に爬なる活字のない場合があったりして普遍的でなく、又「魚形石」という名は、いわゆる石面刻文が魚の描線であるという点で、最も無難とも考えたが、「ギョコクイシ」では、あまりに漢語臭味があるものと思い、結局矢島の人々、すなわち土地の人々の呼んでいる「鮭石」が一番感じを表しているものと思い、そのように名付けることにした。

但し、それを鮭の供養碑と仏教観念で見たり、あるいは千尾の鮭を獲った時、1尾の形を刻んだ一種の記念碑だとか言う人もあるが、そのような解釈によるものではなく、唯、石器時代民のやった仕事であるという点を突き止めようとするものであり、彼等のそれを刻まねばならなかった動機、目的には想到していない。

鮭石は、石器時代からあまり位置も変っていないと想像されるが、現在は長径が殆んど東西に正しく位置している。

大きさは、長径1メートル50センチ、横径90センチ、最厚部は中程で45センチを算し、東部が厚く、西部に次第に薄く、先端15センチの厚さで終わっている。

石質は安山岩、比較的堅質であるが、さすがに風化作用をうけ、昭和14年調査の際無疵であったものが、現在では南縁にヒビが入って、30センチ×10センチほどの部分が剥落している。

鮭石と言われるのは、その上面に魚の形が数多線刻されているからである。大体11、2尾が判然としているが、他に正確に体型を辿り得ないものも相当ある。魚の大きさは、体長最大52センチ、最小は10センチ。その素描は一見象徴的であるが、しかし無駄な線もなく、雄渾なタッチ、いかにも原始絵画の面目を発揮している。

鰓は縦に直線、口はそれまで境に直線1本で表現され、目は丸点、尾は撥形に刻まれている特徴がある。

魚は石の長軸の東端を上方として、従って背を東にし、口を北向きにして描かれたものが大部分であるが、中には頭を東にし、真っ直ぐに浮かび上がるような姿態、また斜めに東

に向いているものもある。

しかし、それ等の群魚のうち西へ頭を下げて潜るような動作をとったものはない。

そのようなことから考察して、全魚を同一人が刻したとしても、また幾人でも描いたとしても、その者、あるいはその者達は右利きの人々であったことが、うなずける、口先が左へ向いているからである。

また各タッチの力の共通している点から考えて、同一人の作と考えると間違いないと思う。次に北向きの側面に、意味の判からない刻みがある。かつて喜田貞吉博士が調査の際、鹿の頭を表現したものらしいと語られたというが、昭和14年、武藤が佐々木熊造氏と、その側面を掘り下げて見たら、それが長さ5センチほどの線と並列したものが続いて下がっていることが判かり、あるいは魚の血痕を表現したものではないかと考えたことであった。今回さらに深くその部分を発掘結果、その点線が石の厚みの3分ノ2迄も続き、また飛び飛びに同じ条痕のあることが判明した。

▼石器

①石斧 鮭石に伴出したもので、1箇所はおそらく蛤刃であったと想像される（刃部欠如しているが）磨製石斧（第6図、1）、他には薄身の半磨製品（同図、3）である。

②石小刀 6箇所出ているが、（第6図）、うち右利きが3箇所、左利き3箇所である。

そのうち1箇所が、前述のように発掘目的であった八塩山に産する由利郡の石器原料石、鉄石英であることも注意される。これ等の石小刀のうちには、鮭石の線刻に実際使用したものもあることであろう。

③石皿 有脚石皿破片であること、前述の通り。但し一般の石器時代遺跡から出る石製遺物であるが、この場合、県内の他の組石、或は積石遺跡から出る例と同じく、この遺跡で発見された二つの積石に関連して考えられる遺物と言えよう。

④発火石 3箇所出土。平石の一面一孔で、叩石というよりは発火台石と考えられるもの。その証拠に甚だ粗面である。

⑤丸石 5、6箇所出たが、積石に関連してと、また、叩潰石として食料調製の道具であったことが考えられる。

▼土器

鮭石に伴出の、厚手渦巻浮文土器破片、（第6図①の1）により、遺物が石器時代中期であることが判ったが、さらに住居地であったと思われる上方台地から採集された土器破片、（同図①の3、4、5）も同時代であることにより、いよいよ鮭石が石器時代刻文石であること、確証付けられたと言ってよいと思う。

他の鮭石遺跡と遺物

▼大谷地（オオヤチ）の鮭石

前述のように鳥海山の5百メートル高地（第3図、下）からも鮭石が発見された。（第2図、2）

それには磨製石斧（同図、3）が伴出、石器時代遺物であることが知れるが、発掘を行わないので、土器の種類は未だ判からない。矢島郷土史学会の宿題であるゆえ、そのうち判明するものと思う。

また鮭石ではないが、そこから更に上方の祓川神社のある1,422メートル高地から、

昭和26年8月に、雁股の石銭が2ヶ採集されている。居住地ではなく、狩猟、その他の理由での仮住居か、はたまたそこを通過した時の遺留品か判らないが、この標高は、石器時代の注意された、秋田県内の最高地である。

この大谷地の鮭石は、長径65センチ、短径40センチ、厚さ35センチの安山岩の一面、中央からやや左下に左向きに1尾を綺麗に彫ってある。しかもその描写が、前杉の鮭石を刻したと同一人の手によったものと思われるほど酷似している。口の直線なる。鰓のやはり直線的なる。尾の撥形なる。実によく似ている。

体長は25センチ5ミリである。

▼針ヶ岡の鮭石

発掘の年の春、やはり齋藤氏の発見したものであるが、幸い発掘を機会に調査することができた。(第3図、下。第2図、1)

針ヶ岡部落から鳥海山旧道に沿うて新道を通した際、その新道に転げ落ちた大石の面に、魚刻のあることを齋藤氏が発見されたもので、調査の際部落の人の話しでは、新道へ転げ落ちた石、しかも重く大きい石なのでダイナマイトで爆砕の話も出たという。まさに危機一髪というところであったのだ。齋藤氏の慧眼なくしては、世に浮かばれなかった石である。その後矢島警察署のはからいで、殺生石ならで、「この石は文化財だから手を触れるな」の立て札が建ち、保護されていたが、現在は前杉の大盤石と共に、役場前に運ばれ保存されている。

石は長径80センチ、短径68センチの、大体三角形とも見得る不規則な輪郭で、厚さ60センチ、一面に7、8尾が線刻されており、そのうち長径から考えて、上向きが2尾、下向きが1尾判然としている。その上方にも水平に1尾いるようである。

体長、上向き、下向きの2尾とも32センチで、口、鰓の直線、尾の撥形の描写法、これも前杉の鮭石に酷似している。

しかも石の転げおちて来た上方の畑地は、石器時代の豊富な遺物散列地で、やはり中期の厚手土器、(第6図、①の6、7、8)が出て、前杉遺跡と同時代なことを物語っている。同遺跡からは小刀も相当出ていて、(第6図、④) うちに鉄石英を原料石とする優品の多いことは注目に値する。

稲住温泉の鮭石との比較

秋田県には、他に古くから知られている鮭石が一つある。(第2図、④)

雄勝郡秋ノ宮村稲住温泉のものがそれで、百余年前、菅江真澄翁も注意し、その著「雪の出羽路」、雄勝郡4巻に

取上石という路のべに魚形石あり、こはむかし徳巖の弟子なる小法師童の戯れに彫りつけたるといへり

と採録している。その後、人々から顧みられないまま土中に埋没していたのが、大正年代、温泉の地ならしの際出てきたのである。現在は温泉の氏神堂の傍らに置かれてある。

真澄翁に聞き書きのように、小法師ワラの悪戯であれば論もないが、悪戯にしてはあまりにも念入りである。

石質、石英粗面岩とも見え、随分硬質で、金属利器を使用するならタガネ彫りでなければ出来ない仕事で在る。

しかるに条痕は、タガネ彫ではない。その刻線は、石小刀の刃でなければ望み得ない。石は長径1メートル6センチ、底径65センチ、2辺の長い三角形に近いもので、その一面に大小6尾ほどの魚形が彫られている。

最大の魚の体長は45センチ、最小は10センチである。そして他の魚は、石の上方と考えられる三角形の頂点に向いているのに、1尾だけが下方に向いている。これを描写から考えると、その1尾だけ右利きの人が彫り他は左利きの人が刻したことになる。

魚形の表現は、矢島のものより写実的で、鰓は鰓らしく表してあり、特に尾形に特徴があり、矢島のものが皆撥形であるに反し、内曲でイルカの尾の感をうける。

しかし稲住のものも、矢島のものも、現在の石碑を建てるような観念で、基底の大きい部分を下にして、地上に建てたとは考えられない。共に各先端近くまで魚が刻まれているからである。もしそれ等の石の安全に立っているほど、土を彫って立てたとすれば、折角の魚形が土におおわれて隠れてしまうからである。矢島、稲住、ともに寝てるままで刻し、そのままを眺めたものと考えられる。

この稲住の石あたりも石器時代遺跡で、かつて山形県の人が、発掘した土石器を石油箱に詰め、荷馬車で2台も運んだことがあると語る人もあるが、今のところそこに土器破片の一片も見出だし得ないこと遺憾である。

もし土器が薄手で、後期のものであれば、魚形の写実的なことと一致して面白い。矢島の鮭石が、そろいもそろって、3箇所とも石器時代遺跡から出たこと、同じく稲住も石器時代遺跡であるという事実は、しの石の魚形も決して小法師ワラの悪戯措きでなく、立派に石器時代民が石小刀を奮って刻んだ原始芸術であることを、雄弁に物語っていると思う。

むすび

発掘結果、鮭石の所在地が石器時代遺跡であり、しかも土器系統により中期の遺跡と知り、したがって鮭石面の魚形刻文が石器時代民の仕事であることを確認し得たことは、何よりも大きな収穫であった。

それに思いがけず副産物のように、積石構造まで出現したのである。その下を検することにより、同じ時代でも、袖野のように単位の纏まっている組石と呼称し得るものの下には、明確な輪郭と深さを持つ穴があり、この前杉遺跡、あるいは仙北郡神代村黒倉遺跡のように、組石と見得るものの下の穴は、不規則であり、比較的浅いことが知れる。それが積石構成の比較的粗雑なものと相俟って、同じく中期と言っても、少なくともその形式上、古い型に属するものではないかと考えられるのである。

もしそれらが墓地とするならば、丁寧に穴を掘って埋めないで、地表をわずかに搔いて屍体を置き、その上に僅か土を盛り、石を積んだ葬法が考えられる。

また、発掘が機縁で、大谷地の鮭石も、針ヶ岡の鮭石も共に石器時代の遺物であることを知ったほか、鉄石英を原料とした石器が、前杉からも、針ヶ岡からも出て、八塩山産の原料石を採取した遺跡の数をさらに2ヶ所加え得たことも嬉しいことであった。これにより鉄石英を原料とする石器の多いこと、由利郡遺跡の特色として挙げ得ることになった。

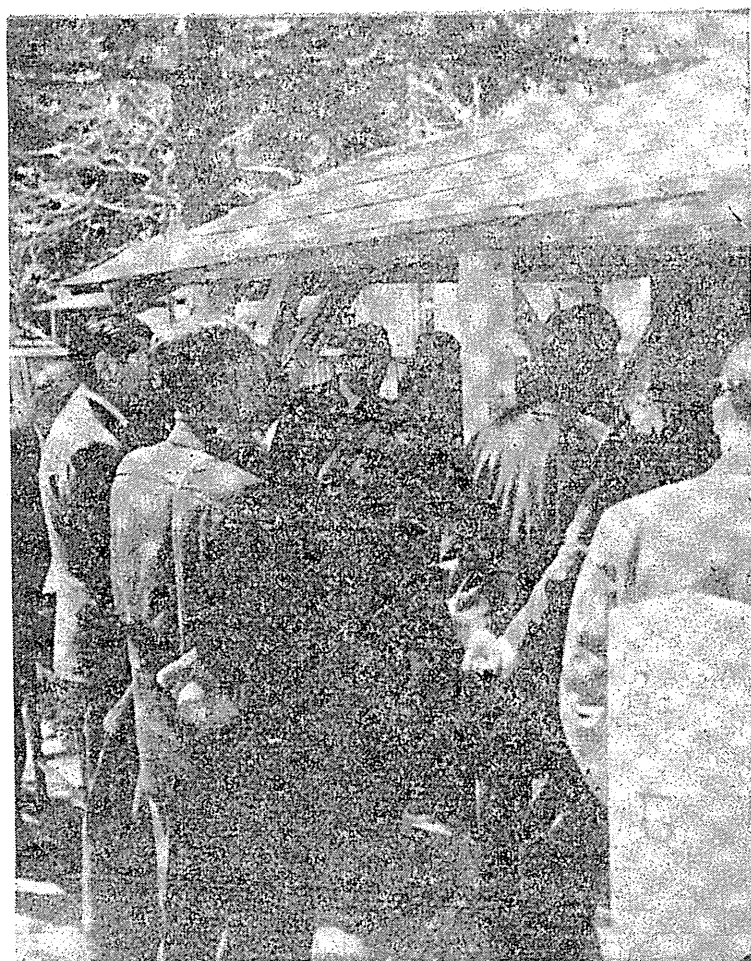
(付記)

- ・ 鮭石のうち、前杉のものは昭和28年9月、県文化財に指定された。
- ・ 針ヶ岡、大谷他のものは、同29年2月指定。
- ・ 同29年4月4日には、鳥海山にスキー登高においでになった、高松宮様は役場へ御立寄りの際、特に鮭石を御覧なられた。
- ・ 同年5月27日に、旧石器時代絵画研究権威者である日本考古学研究所長(スイス人)ジョセフ・マリンガー氏の調査があった。

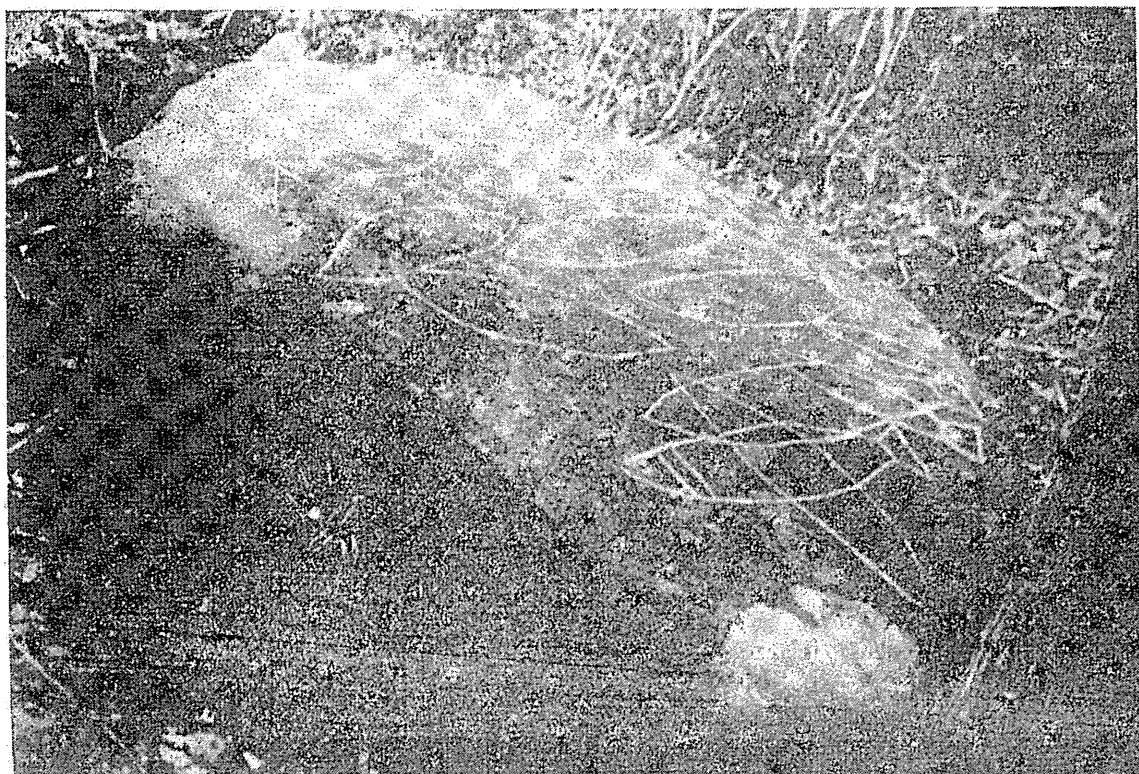
発刊 昭和29年6月29日
矢島町教育委員会

第一圖版

- 1 鮭石御覽の高松宮様
- 2 龍杉の鮭石

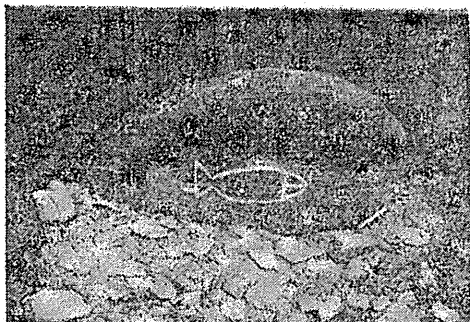


1

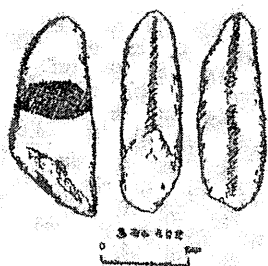


2

第二圖版



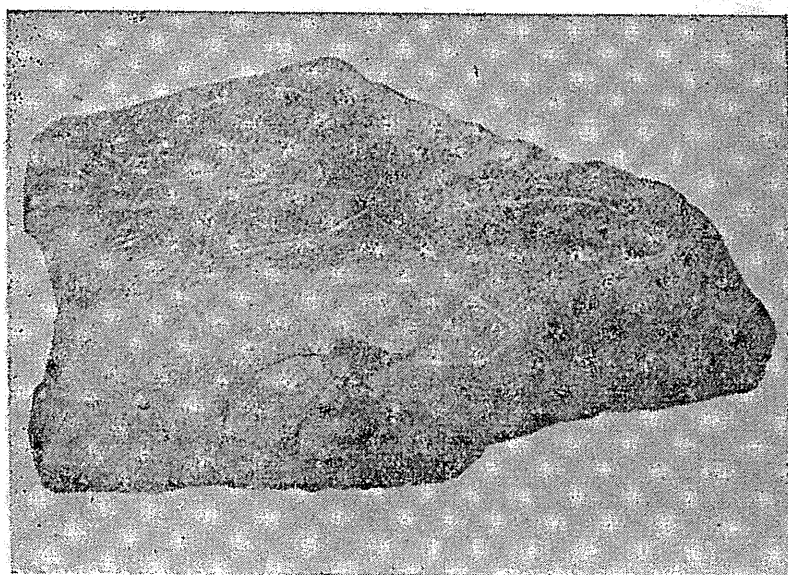
大谷地の鮭石 2



大谷地鮭石伴出石斧 3

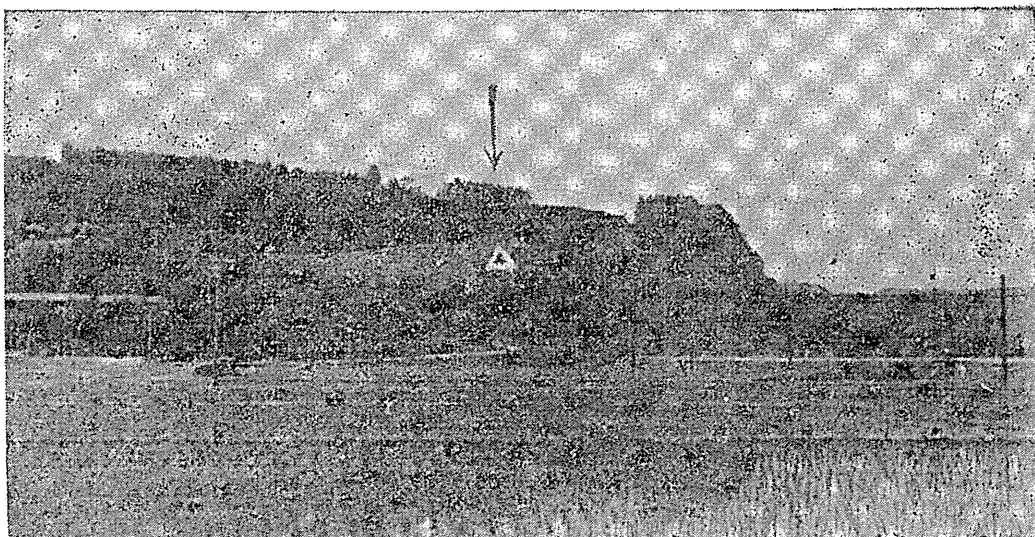


針ヶ岡の鮭石 1



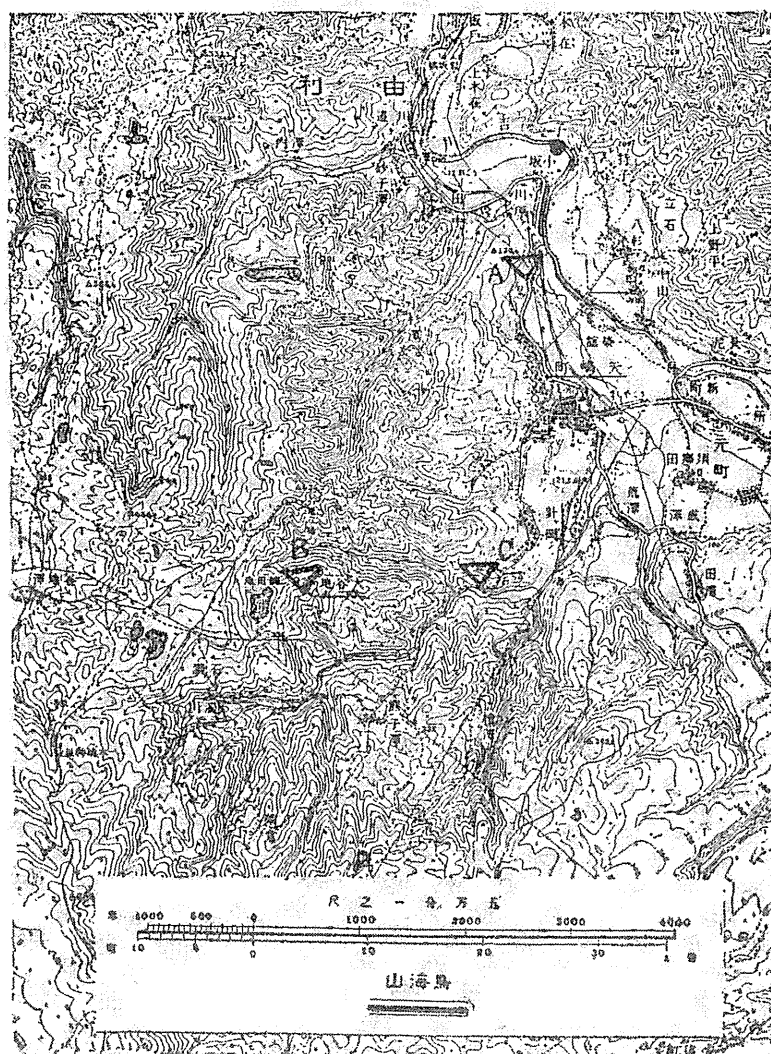
稻佳の鮭石 4

第三圖版



前杉遺跡遠望

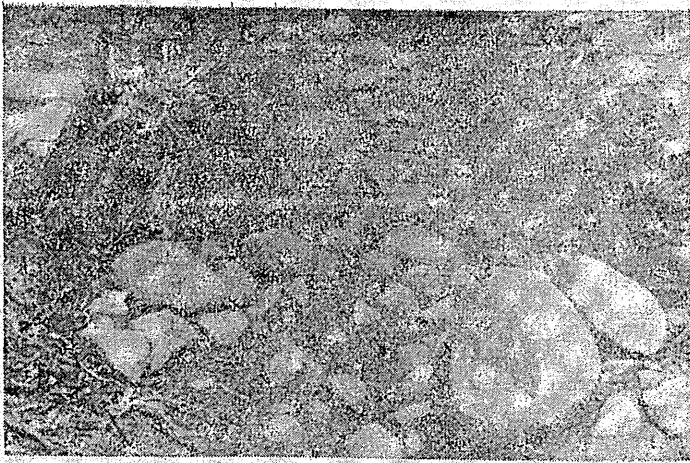
1



鮭石所在地圖 ▽

2

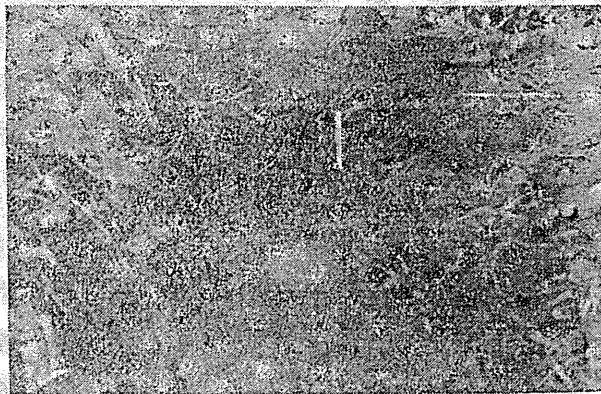
第四圖版



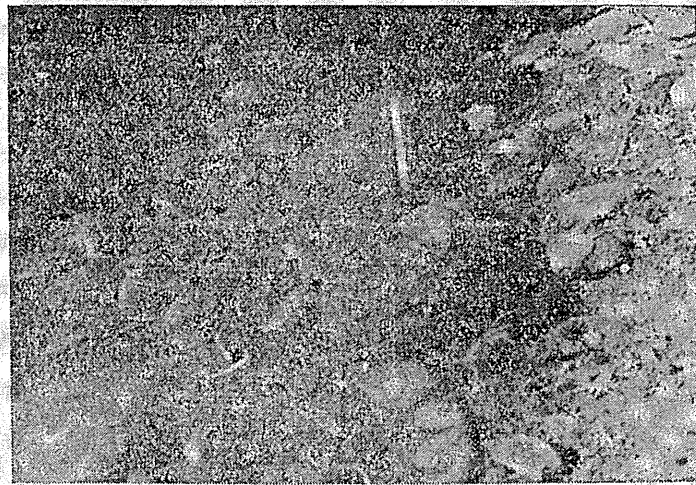
1

1 第一號組石

2 第一號組石下穴



2

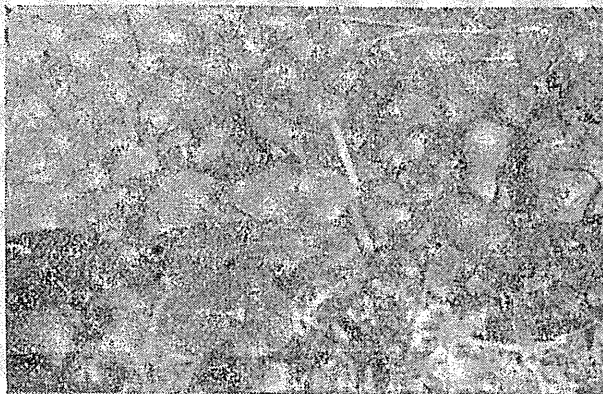


3

3 第二號組石

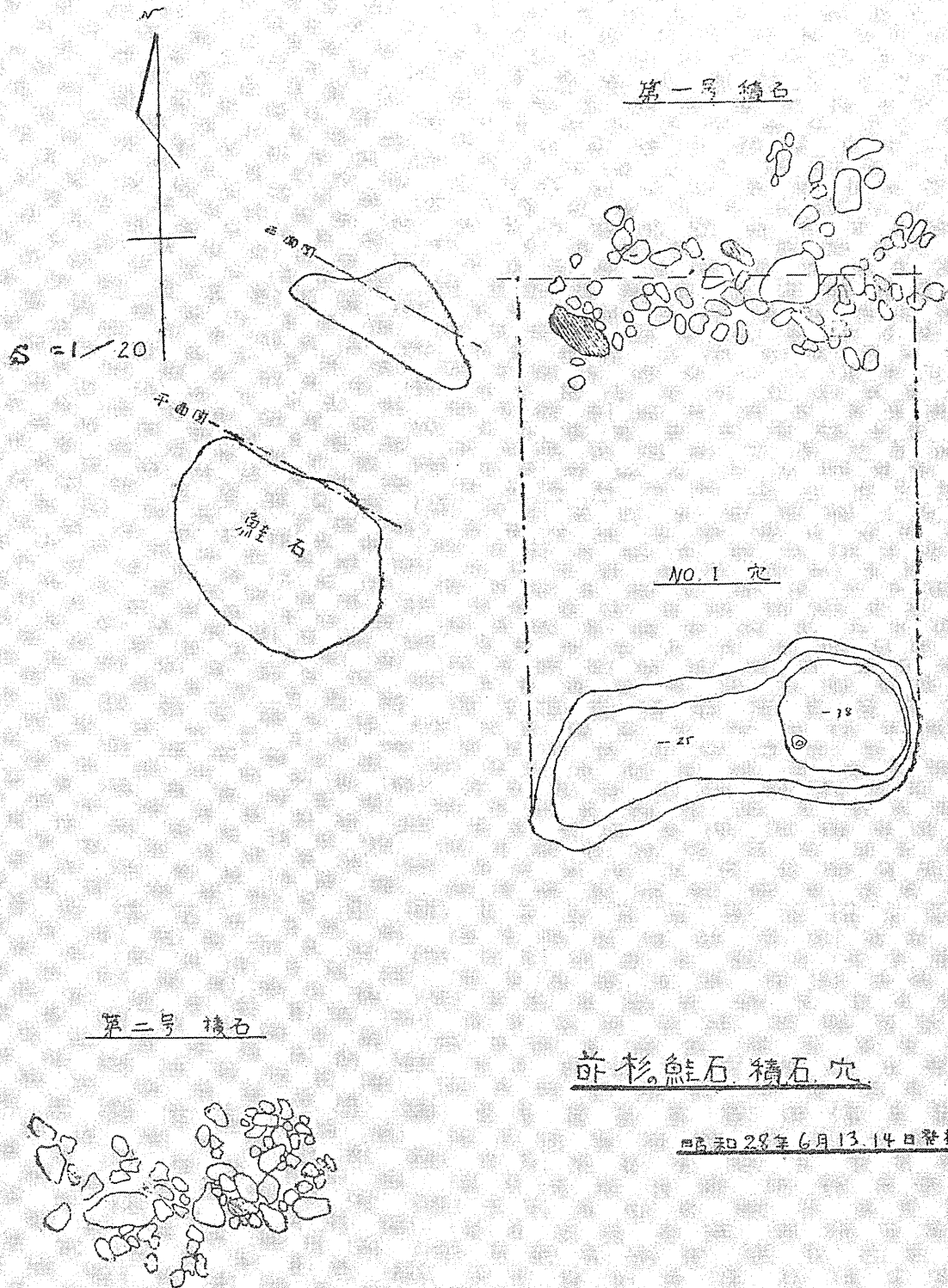
4 第二號組石

東から西



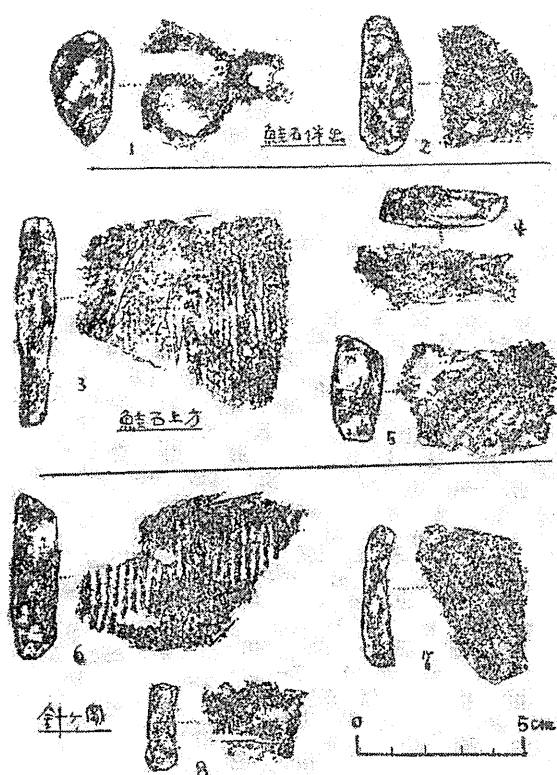
4

第五圖版



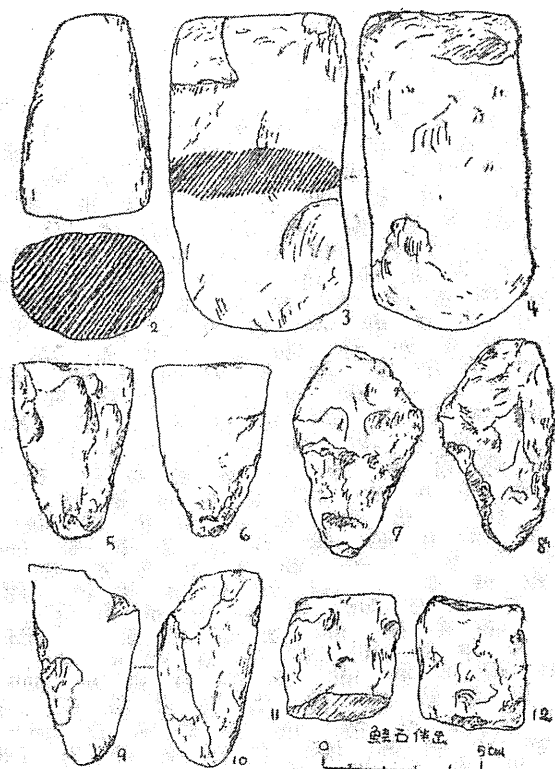
前杉遺跡測圖

第六圖版



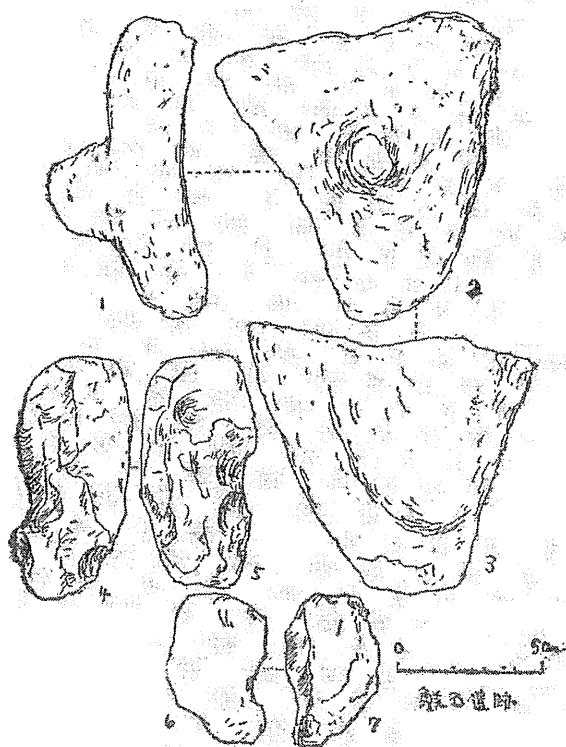
名遺跡の土器破片

1



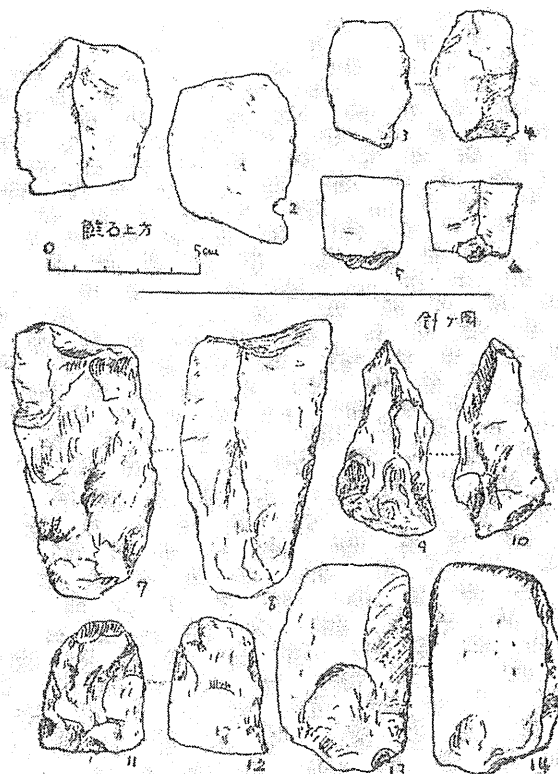
前杉鮭石伴出石器

2



前杉鮭石伴出石器

3



前杉上方と針ヶ岡の石器

4

以下資料写真

